

# ドイツ政治史とキリスト教

西南での研究と教育の40年

河 島 幸 夫

## 目 次

はじめに

- 1 人生の原体験としての戦争
- 2 キリスト教との出会い
- 3 法学と政治学 仙台での学び
- 4 政治思想史から政治史へ 神戸の大学院にて
- 5 最初のドイツ留学 ハイデルベルク
- 6 ナチズムとプロテスタンティズム
- 7 ナチズムとカトリシズム
- 8 ファウルハーバー研究 ミュンヘン大学にて
- 9 ドイツ現代史とキリスト教

おわりに

主要著書・主要訳書

## はじめに

本日このようにして西南学院大学での最終講義の機会を与えられ、多くの学生、教職員、市民の皆さまのご来場を賜りましたことを、心から深く感謝申し上げます。

今から42年前の1970年、28歳の時、西南学院大学の法学部が創設されて4年目に私は政治学原論の専任講師としてこの福岡の地に住むようになりました。

八〇

当時は法律学科だけで専任教員はたった7、8名、政治学分野は私だけでした。残念ながら当時の先輩教員の多くは亡くなりましたが、中尾英俊先生、大内和臣先生、堤克彦先生、岡村堯先生はご健健とお聞きしています。

私の研究テーマは「ドイツ政治史とキリスト教」で、いわば学際的な領域なのですが、なぜこのような研究をするようになったのか、その動機も含めてこれまでの研究の歩みを振り返ってみたいと思います。

## 1 人生の原体験としての戦争

私は太平洋戦争が始まって間もなくの1942年2月に兵庫県小野市（当時は小野町）に生まれました。父親は時計技師であるとともに小さな電気店を営んでいました。戦争の末期に父は海軍の二等水兵として召集され、長崎県大村の海軍航空隊で戦闘機紫電改の整備中に脊髄損傷の重傷を負いました。下半身が麻痺しましたので、父はそれ以後、母による介護と車いすの助けによって戦後の10数年を生き延びましたが、私が大学2年生の冬に亡くなりました。

すでに子供の頃、私は父がどうしてこんな不幸な目に合わなければならなかったのかと、考えるようになりました。この不幸の原因は戦争です。もし戦争がなかったら、父は負傷することなく、電気商の仕事をやり続けることができたでしょう。誰が一体この戦争を引き起こし、指導したのか。戦争と平和、すなわち政治は人間の生活に大きな影響を及ぼします。戦争をせずに政治を行うことが幸福な将来を築くために必須の条件ではなかるうか。これが私にとっての人生の原体験となりました。

それだけ一層、1947年に公布された日本国憲法がその第9条で戦争を放棄し、軍隊を持たないことにしたと知ったとき、私の感激には大きなものがありました。それ以来、政治が私の関心領域となったわけであります。

九

## 2 キリスト教との出会い

小学4年生の時、級友の藤本四郎君（後に画家として拙著の表紙絵を担当）

が隣村にある日本キリスト教団（プロテスタント）の小野教会の日曜学校に誘ってくれました。そこでの交わりや聖書を通じて、私はキリスト教という未知の世界を知るようになりました。高校生の時代には無神論的な考えになった時もありましたが、大学入試に全敗したのをきっかけに再び聖書を真剣に読むようになり、受験浪人の年のクリスマスに小野教会で洗礼を受けたのであります。その頃、小野教会での聖書研究を通じて大川義篤牧師はローマ書（特に信仰による義認）や創世記の注釈だけでなく、カール・バルトやデイトリヒ・ボンヘッファー、ルドルフ・ブルトマンの神学、ナチス時代のドイツ教会闘争や告白教会のことをも青年たちに教えて下さいました。

### 3 法学と政治学 仙台での学び

1961年の春、故郷を遠く離れた仙台の東北大学法学部で私は法律・政治・歴史の勉強を始めました。当時の私の夢は、尊敬するアメリカ第16代の大統領、奴隷解放で有名なエイブラハム・リンカーンのような正義の弁護士になることだったのですが、残念ながら法律学は私には向いていないということに、だんだんと気が付き始めたのです。むしろ政治学や歴史、神学に興味を感じるようになりました。これには仙台での学生時代の4年間をキリスト教青年会の学生寮で過ごしたこと、政治学者でクリスチャンの宮田光雄教授の聖書研究会に通ったことが大きく影響していると思います。当時は法解釈学の本よりもマックス・ヴェーバー（社会学者）やエルンスト・トレルチ（神学者）、ゲオルク・イェリネック（憲法学者）、それに外国文学のトルストイやドストエフスキー、ロマン・ロランの長編小説に没頭したものでした。

### 4 政治思想史から政治史へ 神戸の大学院にて

私の東北大学学生時代の恩師・宮田光雄先生は、私にピューリタン革命やアメリカ独立戦争における人権と民主主義の歴史的源泉の研究を勧めて下さいました。しかし故郷に帰った私は、神戸大学の大学院でまず、プロテスタント教

会の創始者でドイツの宗教改革者マルティン・ルターの政治思想にトレルチの研究（主として彼の著書 *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*, 1912）を参考にして取り組み、「エルンスト・トレルチのルター論」という修士論文を書き上げました。

もともとは故郷の学校の社会科の教師になることが大学卒業当時の私の望みでしたが、大学院での勉強を続けていくうちに研究そのものを続けたくになりました。そして神戸の博士課程では指導教授の政治学者・西川知一先生の影響を受けてドイツの宗教政党史を調べるようになりました。特にビスマルクの時代（19世紀後半頃）におけるプロテスタントの政治・社会運動としてヨハン・ヒンリヒ・ヴィヘルンと内国伝道、アドルフ・シュテッカーやフリードリヒ・ナウマンのキリスト教社会主義の政党形成の特徴と問題点が私の関心を引きました。そして単位取得論文として「キリスト教社会主義の思想と運動 世紀転換期におけるドイツ・プロテスタンティズムの政治的対応」（『西南学院大学法学論集』第3巻1号、1970年4月）を書き上げたのです。この領域に関しては、当時、それ以外に数編の論文を書いています。

## 5 最初のドイツ留学 ハイデルベルク

西南学院大学法学部に政治学の教員として赴任した翌年、私はドイツ学術交流会（DAAD）の奨学金を得てハイデルベルク大学に1971年夏から1973年夏まで2年間留学することができました。そこでの指導教授ヴェルナー・コンツェ（Werner Conze）先生の指導のもとで第一次世界大戦とドイツ革命、ヴァイマル共和国の時代のプロテスタンティズムについて研究を進めました。

ちょうどその頃、ブランド政権の推し進める新しい東方和解政策をめぐって当時の西ドイツでは激しい政治・外交論争が繰り広げられていました。そこで私はハイデルベルク滞在中に政治学者として歴史研究とともに大きな興味を持って現実政治の動向を分析して書き上げたのが、「西ドイツの外交政策と連邦議会選挙」（『西南学院大学法学論集』第6巻1号、1973年7月）であります。

日本に帰国後、戦後ドイツの宗教政党であるキリスト教民主同盟・社会同盟

については2編の論文を書きました。

## 6 ナチズムとプロテスタンティズム

1980年代と90年代における私の主要な研究はナチズムとプロテスタンティズムに関するものです。その成果として主著『戦争・ナチズム・教会 現代ドイツ福音主義教会史論』（新教出版社、1993年。東北大学・法学博士論文）を世に出しました。これは次のような内容から成り立っています。

- 1) 第一次世界大戦と福音主義教会
- 2) ドイツ革命とキリスト教会
- 3) ヴァイマル共和国の政治と宗教
- 4) 第二次世界大戦前夜の福音主義教会
- 5) 戦争と教会
- 6) 戦時下ドイツの宗教弾圧と教会生活
- 7) 《生きるに値せぬ生命》の抹殺構想とキリスト教会
- 8) ナチ《安楽死作戦》とペーテルの抵抗

宗教改革以来、400年にわたってドイツのプロテスタンティズムは政治権力に強く従属してきました。しかし第一次世界大戦と1918年の革命によって大きな転回が訪れます。第一次世界大戦の開戦を熱狂して迎えたプロテスタント教会は国家教会制の崩壊ののち、敗戦と革命の混乱期を乗り切り、ヴァイマル共和国という世俗的国家の中で教会の伝統的な権利と特権を保持し続けることに成功しました。とはいえこうした外面的な成功も内面的な信仰の強化には寄与しませんでした。ただ、君主制による教会の保護監督が無くなった結果、教会は内面的な独立への手掛かりを掴むことができたのでした。

キリストの教会としてのアイデンティティを再発見し、教会固有の委託を再認識するためには、プロテスタント教会はナチズムによる支配を経験しなければなりません。具体的にはナチス的なプロテスタントの運動である〈ド

イツ的キリスト者》信仰運動の台頭による信仰と教会との危機、ナチス官憲による教会弾圧、第二次世界大戦下の途方もない大量虐殺に教会は直面させられます。これらの非人間的な苦難の経験を通じて、はじめて教会は苦難と十字架と復活との主であるイエス・キリストの教会として教会固有の委託を自覚するようになったのです。教会は、一方では、福音宣教に固着し、再発見したキリストの王権的支配に固着することによって、教会固有の課題を再発見しました。他方、教会は教会闘争によってはじめて政治権力を相対化して位置付ける視点を獲得することができ、最も弱い人たちの生命をナチスの国家権力に対して守ることを教会自身の任務として引き受けたのです。1934年に告白教会が発表した「バルメン宣言」はそれを示唆する最高のドキュメントであったと言えるでしょう。その第5命題は次のように述べています。

「国家は・・・人間的な洞察と人間的な能力のはかりに従って、暴力の威嚇と行使をなしつつ、正義と平和のために配慮するという課題を、神の定めによって与えられていることを、聖書はわれわれに語る。・・・/ 国家が、その特別の委託を越えて、人間生活の唯一にして全体的な秩序となり、従って教会の使命をも果たすべきであるとか、そのようなことが可能であるとかいうような、誤った教えを、われわれは退ける」

全体としてはプロテスタント教会はナチスの暴力体制に対して積極的な抵抗を行いませんでした。とはいえわれわれは、ファシズム体制の下ではほんの小さな抵抗や不服従を敢行することさえいかに困難であるかという真実を見逃してはならないであります。それゆえ、当時の教会が民衆の心の中にナチス・イデオロギーに対する防壁を築いただけでなく、教会独自の、個別的で受動的な、非暴力抵抗を行ったことは、決して低く評価されてはならないでしょう。ドイツのプロテスタント教会はナチス体制下での受難と戦いの経験を教会自身の本質的転換の契機とすることができたのです。つまり教会は、当時、ナチス・ドイツとは別の《もう一つのドイツ》が存在したことを証明し、やがては戦後のドイツ民族の再建にとって力強い精神的支柱を提供することができたのです。

さて1995年夏から1996年夏までの1年間、には私は西南学院大学の研究出張で第2回目のドイツ留学をルール工業地帯にあるボーフム大学で体験しました。この時は神学部のギュンター・ブラーケルマン（Günter Brakelmann）教授の下でこれまでの研究をさらに補充し、前進させて、多くの研究会に参加し、多くの研究者や関係者との交流を深めることができました。そして帰国後に書き進めた論文をまとめてやがて出版したのが私の第二の主著である『ナチスと教会 ドイツ・プロテスタントの教会闘争』（創文社、2006年）であります。この書物は次のような構成になっています。

- 1) 独裁国家と教会 ナチス政権初期の福音主義教会
- 2) ナチスのユダヤ人迫害とプロテスタント教会
- 3) ナチス安楽死作戦と内国伝道 ドイツ・キリスト教社会福祉の試練
- 4) テオフィール・ヴルム監督の抵抗 戦時下ドイツ教会闘争の一齣
- 5) 戦争末期の古プロイセン合同告白教会
- 6) シュトゥットガルト罪責宣言への道

ここでは特に、ドイツが第二次世界大戦に敗れ、ナチス暴力支配が崩壊した5ヶ月後の1945年10月にプロテスタント教会の理事会が発表したシュトゥットガルト罪責宣言の意義を見逃すことができません。「私たちは大いなる痛みを持って申し上げます。私たちによって多くの諸民族と諸国との上に果てしない苦難がもたらされたことを。・・・私たちは自らを告発します。もっと勇敢に信仰を告白しなかったことを、もっと忠実に祈らなかつたことを、もっと喜ばしく信じなかつたことを、そしてもっと熱烈に愛さなかつたことを。」

この罪責宣言は、教会自身の新生を訴える第一歩であるのみならず、古いドイツの死と新しいドイツの誕生を予告する兆しでもありました。ナチズムによって破壊されたヨーロッパ諸民族のドイツへの信頼は、まず、（当時は連合国による直接占領下で存在しなかつた）ドイツ政府によってではなく、ドイツの教会によって、回復への手掛かりを与えられました。戦後のヨーロッパの和解と平和への道は、このようにしてドイツのキリスト教会によって備えられたの

です。

こうした研究の積み重ねによって、私はナチズムとプロテスタンティズムの関係に関する考察をいっそう掘り下げることができたと思います。

## 7 ナチズムとカトリシズム

そうするうちに私は、ドイツ現代史の中でカトリックの人口が3分の1の少数派でありながら重要な役割を演じていることに気付きました。ドイツの現代史における政治と宗教が私の研究テーマであるからには、プロテスタントのことだけでなく、カトリックのことも学ばねばならないと悟り、2000年頃から、まずナチズムとカトリック教会の関係について調べ始めました。これは、ひとつには、神戸大学の大学院生時代に指導教授の西川知一先生がよく指摘されていることでもあったのですが、西川先生が亡くなられる頃になってやっとこの問題領域に私も取り組み始めたわけであります。

### 1) ナチスの政権掌握とカトリック教会 拒絶から順応へ

ビスマルクの時代に文化闘争を耐え抜いたドイツのカトリシズムはドイツ帝国の中に堅実に定着するようになりました。第一次世界大戦ではカトリック教会はドイツの戦争を無条件に支持しました。ヴァイマル共和国という新たな状況もプロテスタント教会よりも容易にカトリックには受け入れられました。

ナチズムの台頭に対しては初めのうちカトリックの司教たちは厳しい拒絶姿勢を取っていました。カトリックの選挙民たちの多くも、議会選挙ではナチ党ではなく中央党やバイエルン人民党などカトリック系の政党に投票してしま

七  
三

た。  
ところが彼らの否定的な姿勢は続きませんでした。ナチスが1933年1月30日に政権を掌握して間もなくの3月28日、ドイツの司教団は、ナチズムに対する原則的批判を取り消しはしないとしながらも、拒否的姿勢をやわらげ、順応す

る声明を出してしまったのです。

1933年7月にはナチス・ドイツと教皇庁との間に「政教条約」(Das Reichskonkordat) が締結されました。この政教条約の評価をめぐる戦後の学者たちの間に論争が生じました。つまりクラウス・ショルダー (Klaus Scholder) やグンター・リュウイ (Guenther Lewy) は、政教条約の締結によってカトリック教会のナチスへの抵抗が弱まったから、政教条約の締結は重大な過ちであり、カトリック教会の敗北を意味するとみなします。これに対してハインツ・ヒュルテン (Heinz Hürten) やコンラート・レプゲン (Konrad Repgen) は、政教条約がカトリック側に抵抗への法的根拠を与えることができた、と解釈するのです。私自身の見解としては、真実はこれらの両側面を持っていると思います。

## 2) 教皇回勅「深き憂慮に満たされて」(Mit brennender Sorge)

政教条約の締結にもかかわらずナチス当局は教会への圧迫、弾圧を推し進めました。それに対抗してドイツの司教たちの間には二つの路線が形成されます。一つは《申し入れ路線》であり、ブレスラウの大司教でドイツ司教協議会の議長アドルフ・ベルトラム (Adolf Bertram) やヴィルヘルム・ベルニング (Wilhelm Berning) 司教、コンラート・グレーバー (Conrad Gröber) 大司教によって代表されます。もう一つの路線は《公開抗議路線》とでもいえるもので、ベルリンの司教コンラート・フォン・プライジング (Konrad von Preysing) やミュンスターの司教クレメンス・アウグスト・フォン・ガーレン (Clemens August von Galen) によって代表されました。

ナチス当局による度重なる政教条約侵害と教会への干渉に対してローマ教皇庁=ヴァチカン、ついに1937年3月、ピウス11世の回勅「深き憂慮に満たされて」(Mit brennender Sorge) を発表して激しく抗議しました。この回勅の草案は教皇庁國務長官のエウジェニオ・パチェリ (Eugenio Pacelli) の依頼を受けたミュンヘンの大司教ミヒャエル・フォン・ファウルハーバー (Michael von Faulhaber) によって作成されました。パチェリの補充したこのドイツ語

による回勅はカトリック的自然法に基づいてナチズムを厳しく批判していました。すなわち特に人種、血、総統への崇拜が激しく非難され、単に教会の自由と権利だけでなく、神によって与えられた人権の不可侵性が強調されていたのです。この回勅は、ちょうどプロテスタントの告白教会によるバルメン宣言(1934年)やヒトラーに対する抗議の建白書(1936年)に匹敵するカトリックのナチズム批判であったといえるでしょう。

### 3) 優生学・安楽死・ホロコーストとキリスト教会

ホロコーストといえば、ユダヤ人虐殺が最も有名ですが、それに至るナチス優生政策の重要な第1段階は断種法でありました。1933年7月にナチス断種法である「遺伝病子孫予防法」が制定されたとき、キリスト教会や教会系の病院、療養所、福祉施設はどのように反応したでしょうか。残念ながらプロテスタント教会は断種法を受け入れてしまいましたが、カトリック教会は1930年の回勅「カステイ・コンヌビイ」(Casti Connubii 貞節な結婚)に従って断種をトータルに拒否しました。結婚と出産は不可侵の自然権であって、人間の体と命は神によって与えられた聖なるものであるから、これを損傷することは一切許されないというわけです。しかしながらカトリック系の福祉施設であるカリタス(Caritas)の現場では断種(不妊手術)の実施を許容せざるを得ないことになってしまいました。

こうした妥協の理由としては国家の法律に抵抗することが困難であったこともありますが、もう一つにはカトリック教会の中にもナチスの優生政策に賛同するような傾向が存在したことを挙げるができるでしょう。例えばフライブルク大学のカトリック倫理神学の教授でカリタス学研究所長のフランツ・ケラー(Franz Keller)教授は1934年の『カリタス学年報』(Jahrbuch der Caritaswissenschaft)の中で次のように述べています。「カリタスもまた・・・人種衛生としての民族福祉・健康な遺伝子のための配慮、遺伝病者の増加の阻止に努めなければならない。・・・民族の人種改良によってのみ、地上に神の国を広げていく最善の基礎が作られるのである。』ミュンヘンの大司

教ファウルハーバーもまた、1936年にヒトラーと会談した時、ナチス断種法に対する原則的拒否の姿勢にもかかわらず、《モードゥス・ヴィヴェンディ》(共存的協調方式)の用意があることを示唆しています。

とはいえ、ナチス当局が秘密の内に精神障害者や知的障害者たちを大規模に殺害した《安楽死作戦》(1939-1945)に対してはキリスト教会や関係病院、福祉施設は相当な抵抗を敢行しました。その中でプロテスタントでは福祉施設ベートル(Bethel)と施設長フリッツ・フォン・ボーデルシュヴィング(Fritz von Bodelschwingh)牧師の抵抗、またカトリックではミュンスターのガーレン司教の弾劾説教が有名です。

## 8 ファウルハーバー研究 ミュンヘン大学にて

ナチズムとカトリシズムについての研究を深めるため、以前から文通していたミュンヘン大学の名誉教授で政治学者ハンス・マイアー(Hans Maier)先生の推薦を得て、私は2006年の前期半年間、ミュンヘン大学の歴史学者ハンス・ギュンター・ホッケルツ(Hans Günter Hockerts)教授のもとに留学しました。ここではほとんど毎日、ミュンヘン・フライジング大司教座公文書館に通ってファウルハーバー大司教の関係一次資料を調査・収集しました。しかし帰国後の多忙のために、まだファウルハーバー研究の論文作成は将来の課題として積み残しています。

## 9 ドイツ現代史とキリスト教

ここ数年間には「ナチズムにおける人間改良計画 《生命の泉》(レーベンス・ポルン)を中心に」という論文や「戦後ドイツの教会と平和問題」という論文を書いたのですが、結局、書きためていた数編をまとめて、古希記念論文集として『ドイツ現代史とキリスト教 ナチズムから冷戦体制へ』(新教出版社、2011年)を昨春に出版しました。その概要は次の通りです。

七〇

- 1) ナチスの政権掌握とカトリック教会
- 2) パルメン宣言とその先駆け プロテスタント教会のナチズム批判
- 3) 回勅「深き憂慮に満たされて」の背景と意義 教皇ピウス11世のナチズム批判
- 4) ナチス優生政策とキリスト教会 遺伝病子孫予防法(断種法)への対応
- 5) キリスト教民主同盟・社会同盟 戦後ドイツの宗教政党
- 6) 戦後ドイツの教会と平和問題 プロテスタント教会の姿勢と活動

この書物は、私がカトリック教会と政治の関係を扱った論文を含む最初の著作であります。これを出発点にしてさらに研究を進めたいと願っています。

私がカトリックのことについて研究し始めた動機のもう一つは、プロテスタントのキリスト者たちはあまりにもカトリックのことを知らなさすぎると考えたからでもあります。またもう一つには、日本のカトリックの人たちはナチズムとカトリックの問題についてほとんど研究しておりません。だからせめて私がこの領域のことを少しでも調べてみようと思うわけです。

## おわりに

これまで紹介したこと以外にも、私はたとえば賀川豊彦という人物について少し研究し、小冊子を2冊ばかり出版しました。しかしこれは日本の現代史における政治、戦争と平和を学ぶためでもあります。これまではまだまだ関係資料の収集・調査の段階にとどまっていたから、賀川研究は私にとって残された今後の研究課題のひとつでもあります。

最後に、私が自分の研究や授業担当と並んで続けてきた読書会のことについて触れることをお許し下さい。この読書会というのは一冊の本を読んできて感想を語り合う会のことです。36年前に当時のゼミ生の有志数名の提案で始まりました。長期休暇を除いて1カ月に一回の割合ですから1年に5、6回ということになります。この読書会のおかげで私は自分の専門研究の書物だけでなく、多くの分野の素晴らしい本や知人、友人を知ることができました。そしてほと

んどすべての本が、直接または間接に自分の専門である政治、歴史、戦争と平和にも関係することもわかりました。この活動を通して実に多くのことを学ぶことができたと思ってありがたく思っています。

この42年にわたる西南学院大学での研究と教育を通じて多くの学生のみなさん、教職員、市民の方々と交流し、共に学ぶことができましたことは何よりもの感謝であります。聖書の福音書によりますと、イエス・キリストは「平和を作り出す人たちは、さいわいである。彼らは神の子と呼ばれるであろう」とおっしゃっています。この勧めをしっかりと心に刻んで歩みたいものです。また聖書には「信仰と希望と愛」の大切さが説かれています。「常に喜べ、絶えず祈れ、すべてのことを感謝せよ」

最後に「西南よ、ありがとう」。しかし「さようなら」ではなく、またお会いしましょう。

Danke schön und auf Wiedersehen ! (ダンケシェーン ウント アウフ ヴィーダーゼーエン！)

#### 【主要著書】

- 信仰と政治思想 創言社 1985/1991年  
賀川豊彦の生涯と思想 中川書店 1988/2009年  
激動のドイツと国際政治(編著) 中川書店 1990年  
賀川豊彦と太平洋戦争 中川書店 1991/2008年  
政治学原論 中川書店 1992年(改訂版 2002年)  
戦争・ナチズム・教会 現代ドイツ福音主義教会史論(博士論文) 新教出版社 1993/1997年  
世界平和への道(『激動のドイツと国際政治』の改訂版。編著) 中川書店 2004年  
政治と信仰の間で ドイツ近現代史とキリスト教 創言社 1995/1995年  
ナチスと教会 ドイツ・プロテスタントの教会闘争 創文社 2006年  
ドイツ現代史とキリスト教 ナチズムから冷戦体制へ 新教出版社 2011年

【主要訳書】

K・ゾントハイマー著 ワイマール共和国の政治思想（脇圭平氏と共訳） ミ  
ネルヴァ書房 1976年

G・ミュラー著 現代キリスト教倫理（宮田光雄氏と共訳） Y M C A出版  
1978年

W・フーバー/H・E・テート著 人権の思想 法学的・哲学的・神学的考察  
新教出版社 1980年

H・E・テート著 キリスト教倫理 ヨルダン社 1984年

D・ゼンクハース著 ヨーロッパ2000年・一つの平和プラン 創文社 1992年

追記

本稿は2012年1月20日、西南学院大学2号館203教室で行われた私の最終講義の原稿である。実際の最終講義（平和研究の授業の最終日）は、いくつかの脱線も入っており、また時間の都合上、省略した部分や、この原稿とは異なる部分もある。その点ご了解いただければ幸いである。